The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Narrative Process Coding Systemを用いた心理療法のプロセス研究-日本語の心理療法事例におけるナラティヴ分析法の開発と運用-
Author(s)	小泉, 誠
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101604
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　小　泉　誠　）	
論文題名	Narrative Process Coding Systemを用いた心理療法のプロセス研究 ―日本語の心理療法事例におけるナラティヴ分析法の開発と運用―

論文内容の要旨

プロセス研究は効果研究とともに重要な心理療法研究である。しかし，日本においてその研究法が十分に整備されていないため，欧米に比べプロセス研究の数は極端に少ない。このため，日本語の心理療法に適用可能なプロセス研究法を確立しなければならない。特に，心理療法セッションの録音録画データを逐語的に文書化したトランスクリプトを分析するプロセス研究の導入が必要である。トランスクリプトとはクライエントとセラピストの対話であり，心理療法のナラティヴである。日本においてナラティヴ・アプローチは臨床理論や実践技法として注目されているものの，実証研究，実践研究は十分に行われていない。心理療法のナラティヴ分析法を確立することで，ナラティヴ・アプローチのプロセス研究の知見を蓄積し，臨床実践に根拠を与え，その展開に寄与することができる。そこで，本研究ではAngus et al.(1999)のNarrative Process Coding System(以下,NPCSと略記)という心理療法のナラティヴ分析法を採用した。本研究ではこの分析法を導入し，日本版の開発，そしてその運用を試み，ナラティヴ・アプローチのプロセス研究の促進を目的とする。

本研究は4部構成となっている。第1部では，心理療法研究におけるプロセス研究の位置づけを明確にし，さらにプロセス研究とナラティヴ概念の関連性を明らかにした。そして，NPCSの理論と分析手続きを概説し，NPCSを用いた先行研究を展望した。

第2部では，試行カウンセリング事例を対象に，原版NPCSを用いて2つの研究を行った。研究1では，一般大学生を対象に試行カウンセリング9事例を実施した。各事例3回分のトランスクリプトを原版NPCSにより分割，コーディングし，トピック(話題)とナラティヴモード（3つのナラティヴ様式）の推移を数量的に分析し，日本におけるNPCSの導入可能性を示唆した。研究2では，研究1の試行カウンセリング9事例のうち最も省察的な語りが多かった１事例を取り上げた。原版NPCSで分割，コーディングしたナラティヴを内容，構造，形式の３つの観点から質的に分析した。特に，意味生成プロセスに着目し，心理療法場面でクライエントとセラピストが意味生成にどのように関与しているかを明らかにした。

第2部の研究を通して原版NPCSの問題点が見出された。そこで，第3部では2つの研究から日本版NPCSの開発とその運用可能性を示した。研究3では，原版NPCSの問題点を改良し，日本版NPCSの開発を目的とした。4つの臨床事例を対象に3回分の録音を行い，トランスクリプト化した。合議制質的研究法(Hill et al., 1997)に基づき，複数の研究者が原版NPCSの分析と合議を繰り返し，新たな指標や分析ルールを追加し，さらに評定者訓練法の見直しを行った。結果，先行研究の基準を満たす評定者間信頼性を確認し，日本版NPCSを開発した。研究4では，精神科事例を対象に日本版NPCSを用いた質的プロセス研究を行った。日本版NPCSにより分割，コーディングしたナラティヴを研究2で用いた手続きから質的に分析し，終結期におけるクライエントとセラピストの体験のズレを明らかにし，日本版NPCSが日本のプロセス研究において運用可能であることを示した。

第4部では，本研究の全体議論として，本研究の知見の意義，課題と今後の展開について述べた。まず，本邦で初めて行われた心理療法のナラティヴ分析法の開発についてその意義を示した。研究1の知見からNPCSの用いた量的研究としての意義を述べ，研究2と研究4の知見からはNPCSを活用した質的研究としての意義を述べた。さらに，研究2・4は単一事例を対象としたプロセス研究であり，事例研究との接点とその意義を考察した。

本研究に残された課題として，本研究固有の構造的な問題点を述べた。その後，NPCSについてナラティヴ分析法としての限界を考察した。最後に，日本版NPCSを用いたナラティヴ・アプローチのプロセス研究の今後の展開を示した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　小　泉　誠　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	野村　晴夫
	副 査　教授	佐々木　淳
	副 査　学外委員	森岡　正芳（立命館大学総合心理学部客員教授）

論文審査の結果の要旨

本博士論文は，心理療法の内実を究明しようとするプロセス研究の方法として，実証性の高いナラティヴ分析法を開発し，その具体的運用の方途を示すことを図っている。

第1部では，国内外の心理療法研究にプロセス研究が果たしてきた役割を明確にした後，プロセス研究とナラティヴ概念の関連性を探求した。そして，心理療法のナラティヴ分析法として，英国のAngusら(1999)のNarrative Process Coding System(NPCS)に着目し，その日本版の開発と普及の必要性を提起した。

第2部では，まず，原版NPCSを試行カウンセリング事例に適用した研究を実施した。その内の研究1では，一般大学生を対象とした試行カウンセリング9事例から，各事例3回分のトランスクリプトを抽出し，それを原版NPCSにより分割，コーディングし，トピック(話題)とナラティヴモード（3つのナラティヴ様式）の推移を数量的に分析した。研究2では，研究1の試行カウンセリング9事例のうち最も省察的な語りが多かった１事例をナラティヴの内容，構造，形式の３つの観点から質的に分析した。それらの研究から，日本におけるNPCSの導入可能性が示された一方，原版NPCSの問題点も見出された。

そこで第3部では，日本版NPCSの開発とその運用を試みた。その内の研究3では， 4つの臨床事例から各事例3回分を抽出し，合議制質的研究法(Hill et al., 1997)に基づき，新たな指標や分析ルールを追加するなどの改良を重ね，日本版NPCSを開発した。研究4では，この日本版NPCSを精神科事例に試用した質的プロセス研究を行った結果，クライエントとセラピストの体験のズレが明らかとなり，日本版NPCSの日本における運用可能性が示唆された。

第4部では，以上の研究群から見出された知見の意義，課題と今後の展開を述べている。本研究において開発した日本版NPCSは，心理療法のプロセスを質的・量的の両側面から究明する意義をもつ。さらに，日本の心理療法研究において活発な事例研究法とも接点をもち，相互活用の道筋も示されている。その一方，逐語記録や評定の信頼性といった実証性を重視した半面，多義的概念であるナラティヴが心理療法研究に有する可能性をさらに活かす課題も浮かび上がった。

日本の心理療法研究の現況に照らすと，本邦で初めてナラティヴ分析法を開発し，その運用可能性を示した本研究の学術的・実践的意義は，極めて高いといえよう。上述の課題を将来に残しながらも，本研究が，心理療法のプロセス研究の方法論的議論を促し，ひいては，心理療法実践のさらなる改善と開発を招くことが大いに期待される。

よって，本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。